



## 「髑髏尼の入水」(長門本『平家物語』より)

昨日紹介した本の中には、今回の試験範囲の『平家物語』も登場する。「髑髏尼の入水」である。壇ノ浦の合戦に平家一門は敗れ滅亡したが、それで戦いが終わったわけではなかった。追捕の手は、都の片隅に潜んでいた、まだ6歳といういたいけな幼児にまで及ぶ。引用しよう。

\*

髪、肩のまはりなる若君、幼氣したるを、武士、鎧の上に抱きたり。若君、手をさし出て「ままや、ままや」と泣き給ふ。その後、朽葉の衣着たる女房、年二十二・三と覚しきが、「我子よ、我子よ」と泣く泣く走るがあり。しばしこそ、衣も肩に掛り、裏なし(=草履)も履きたりけれ、後には衣も脱ぎ、裏なしも履かず、「若君よ」といふ声も立てず、「ああ」といふ声ばかりにて走る女房あり。上人、「あれはいかに」と見給ふに、武士、かの若君の首を、やがて掻い切りて、河原に捨てけり。幼ければにや、首をも渡さず、獄門にもかけられず。

かの女房、寄りて首を取りて、身に差し合はせて、余りの事なればにや、泣きもし給はず、ただ生きたる幼き者を抱きたる様に抱き、身に肝心もありとも見えず、ほれほれとして(=呆然トシテ)おはしけり。

\*

母親は子どもをさらった武士の後を必死で追ったが、子どもはとうとう首を切られてしまう。「掻い切りて」は「掻き切りて」のイ音便。「首をも渡さず」というのは、切り落

とした子どもの首を、見せしめの市中引き回しにはしなかったということ。母親はその首を拾った。「身に差し合はせ」とは、体につなげてみたということだろう。切ない場面である。

さて、この母親はその後どうなるのだろう。再び引用する。

\*

上人(=前ノ様子ヲ目撃シテイタ人物)、次の年、天王寺に参り給ひたりけるに、大門よりはるかに遠くのきて、髑髏の尼といふ非人ありけり。同じ乞食の中にもまじらず。その故は、懐に幼き者の首を持ちたるが、日数経るままに、その香りなのめならず臭かりければ、非人、これを加へず。さる程に、ただ一人、すごく(=荒涼タルアリサマデ)過ごしけり。(長門本、十八卷)

\*

ここに描かれている「非人」。「もののけ姫」に登場するようなイメージで捉えてイイと思うが、教科書には決して採り上げることのできない話題である。しかし、かつての日本には確かにそういう階層が存在したのである。

しかし、その非人たちからさえ、生首の臭気故に差別的待遇を受けたというのだから、なかなかスゴイ描写である。そこには、母親のこの子に対する何ものにも換えがたい愛情が読み取れるだろう。

この母親、最後には念仏を唱えながら橋から身を投げて果てる。その時、非人たちはこの哀れな女を丁重に吊ってやったのである。